

# ひぜんだより

肥前精神医療センター総合情報誌

平野院長 御退官記念 特集号

第6号

2010.3

平野先生、ありがとう



# 「肥前

## 吉野ヶ里対談 第6回

って広い部屋があって、そこでいろんなイベントをしていました。僕もステージに立って、マンドリンクラブのギター伴奏をしたこともありましたよ。

語り手；平野 誠（院長）

聞き手；福井基孔（作業療法士長）

福井：先生は研究の分野でも業績を挙げられていて、さらに臨床でも多くの患者さんと向き合って来られて、そうした両立というのは大変ではなかったですか？

編集；藤瀬陽子（CRC 薬剤師）

# 今昔

# 物語」

福井：先生が肥前にいらっしゃったのは何年ですか？

平野：昭和47年です。

福井：この外来管理棟がまだ木造の時代ですね。

平野：そうです。今の管理棟

棟ができたのは昭和52年ですから、それまでは木造の管理棟でした。医局も別のところにありましたし。院内もずいぶん変わりましたよ。今の西1病棟のところにテニスコートがあったり。

福井：ずっと以前に、肥前に来たことがあったんですが、林の中に遊歩道があったのを覚えています。

平野：あれは昭和50年代半ば、齊藤先生（写真C）が辞める前に患者さんといっしょに草を刈って作った遊歩道ですね。

福井：病院の周りの風景も、ずいぶん変わったでしょうね。

平野：私がここに来た頃、この周りで食事ができるお店はラーメン屋さんの東洋軒だけで、しかもカウンターが数席だけでした。そこで、このあたりはそうめんが有名だし、私もそうめんは好きだから、自分で削り節と椎茸でダシをとって、そうめんをゆでて食べていました。ゆで方にこだわって、いろいろなパターンでゆでたり、ストップウォッチを片手に時間を計ったりしていましたよ。1分45秒が至適時間かな（笑）

福井：収穫祭もあつた

たんですよ？作業祭かと思いますが。

平野：今はあ祭は昭和29の一大イベントでして、豚を飼っていて、食べたりします

りませんが、作業年からずっと病院トでした。豚をそれをみんなで食べて、美味しかったですよ。院内にデイセンターと

平野：もともと私は臨床医になるつもりはなかったんですよ。学生時代は休みがあれば、生化学の実験の手伝いをしていて。実験、それとバレーボールばかりしていました。だから、研究者になって、一生試験管を振って…というのが私の将来のイメージだったんですけど、大学闘争の時代になってしまっただけでね。結局、学生運動も終焉を迎えましたが、その紆余曲折の中で研究者像を断念したんです。それで臨床医になったんですけど、そうしたらやっぱり研究をしたいという気持ちも出てきました。そこでまた、大学の研究室に「研究会、抄読会だけでも参加させてください」とお願いしました。参加できることになったときはやっぱり心ときめきましたよ。そこで当院の前院長の内村先生（写真B）にお会いして、その縁で研修医終了後に就職できました。卒後3年目（写真A）でしたが男子閉鎖病棟の病棟医長になって、その頃は4病棟合わせて60人ぐらいの患者さんを受けもっていました。昼は臨床、夜は実験という日々でしたね。例えば内村先生が顕微鏡下で切り出した極々細かい脳の凍結乾燥切片の重さを、超微量電子天秤で測ってました。実験中は息を殺して4～5時間も同じ動作を繰り返すんですが、禅の修行みたいなんですけれど、僕にとっては全然苦痛じゃなかったんですよ。むしろ至福の時間でした。だから両立といってもそれぞれに面白かったですね。

福井：先生が臨床の場面で心に残っていることはありますか？

平野：今は多職種が患者さんに関わっていますが、昔は入院患者さんには医師と担当看護師だけで関わることが多くて、看護師がソーシャルワーカーの役割もすれば、作業療法士や心理療法士の役割もしていました。退院した後は病棟の受け持ち看護師が勤務終了後にアパートを訪問してフォローアップしたりもしてね。そんな中で患者さんや看護師から学んだことも非常に多いです。例えば、患者さんの中には退院が決まったことで不調になる方もいらっしゃるでしょう。そんなときに私が「じゃあ薬をちょっと増やそうか」と提案すると、受け持ち看護師が「いや、原因ははっきりしています。退院するのを不安がっていらっしゃるんです。だから

ひげんだより

平野 誠（院長）

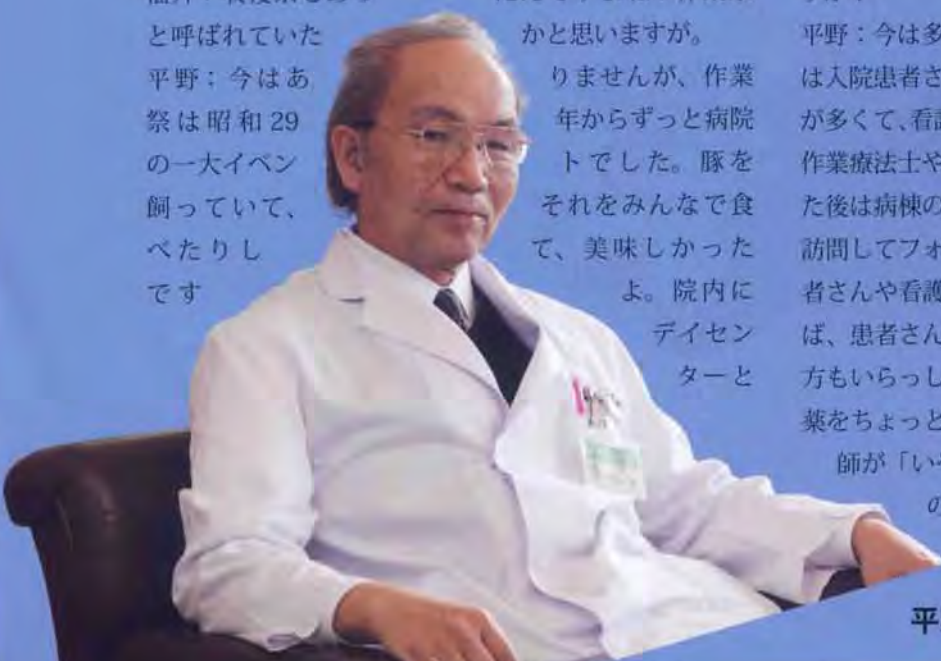




写真 A ;就職間もない平野先生 (昭和 47 年)



写真 B ;内村前院長と平野先生 (昭和 49 年)



写真 C ;八幡厚生病院腎臓院長と平野先生 (昭和 52 年)

ら、私をもっと関わってみますから、薬を増やさずもう少し調子を見させてください。」と言われましたね。そうやって関わっていくことで患者さんに安心してもらうことで退院に至ったこともありました。そんな看護師さんには教えられましたね。今でこそ入院中も外来通院中も多職種での対応で手厚くなっていますが、大事なことは、まだ医療的サポートが必要な患者さんの場合、それが医師か看護師か、それとも他の職種かはケースバイケースだけど、どこに安心感のある関係性があるか、私は「導きの糸」と言っていました、それをいつも意識しておくこと、その大切さを失敗の中から学びました。それこそ臨床経験が少ない頃は、患者さんと向き合っていくのに大変な思いをしたこともありました。体当たりの我流です。けれどその中で、急性期の大変なときにも一生懸命付き合っ、信頼関係を作っていくことが大事なんだと教えてもらいました。

福井：先生が当院に来られたときと今の違いは何でしょうか？

平野：いろいろなことが違いますが、まずは医師の数が違います。今でこそ他の親戚病院の支援をしています、私が就職する少し前までは、当院が大学からの派遣を受けていました。昭和 40 年代になって医師定着の動きになったと聞いています。昨今の研修医制度改革からは、「研修型病院」というビジョンを打ち出して、医師数確保に努めてきました。楽観視するつもりはないけれども、今はその成果が出ていると思います。その延長線上に、来年度の研修センターの建設もあります。病院としてはまず患者さんにとっていかに魅力的であるかが大切ですが、医師にとって魅力的な病院か、ということもとても大切なことだと思います。後期臨床研修システム運営については、いろいろと医局会でも議論されていますが、長い目で見ればピンチはチャンスですよ。今までだって、肥前はどうかとやらと思ったことはありました。昭和 50 年代単身退院ブームというのがあって、社会的入院をされていた患者さんがどんどん退院されたときには 100 人ぐらい入院患者さんが減りました。ちょうどその頃医師も開業などで辞められる方が多く

て、患者さんは減るし、中堅医師も減るし、という状況でした。そのときにはみんなで集中的に話し合っ、空いたベッドはアルコールの専門病棟を作るなどして専門分化していこうということになりました。それが現在の当院につながっていると思います。だから危機はチャンスと思わないといけないんですよ。

福井：なるほど。さて、もうすぐ退官を迎えられるにあたり、今の心境はいかがですか？

平野：私は 38 年間当院にいますが、40 代半ばから副院長だったので、半分ぐらい管理職だったこととなります。国立病院から独立行政法人になっていくという中で、1999 年に内村先生と 2004 年像を描きました。そのときに描いたものは第 1 期中期計画の中で大体実現したり見通しが立っています。その上、国立の時代は考えられなかったことですが、昨年度から収支相償化が実現しています。先輩や同僚の先生に恵まれ、そしてエネルギーギッシュな職員の皆さんのおかげで、自分ができることはやり切ったと思えて感謝しています。だから今は、なんか少し気が抜けたような感じでしょうか。私から肥前を差し引いたらゼロのような生活パターンでしたので、自分自身そのあとどうなるか少し心配もしています。

福井：そうですか。ありがとうございました。(了)



福井基孔 (作業療法士長)

# 特集 肥前 アーカイブズ

むかし、むかしの肥前の写真です。風景は今とずいぶん違いますが、生活があり、人と人との交流があり、喜びも悲しみもあるのは、永遠のようです。



旧管理棟玄関前ロータリー  
昭和51年まで



外来管理棟竣工当時  
昭和52年



昭和20年代の外来治療棟です。



昭和20年代



後ろは病棟です。



大豆の収穫



城原川です。

日ノ隈遠足。



茶畑。昭和50年初旬

ひげんだより



所長

PSW

総婦長

医務課長

幹部職員に送られての退院式



ナイチンゲールのような総婦長さんでした。



後ろは現在のペガサスです。

病棟調理。七輪を用いています。

昭和30年代



昭和30年のクリスマス会



伊藤正雄所長。昭和30年代



自給自足のための稲作



昭和47年  
運動会仮装行列



川遊び。横田川にて。



有明海で蘆(よし)取り

懐かしいオート三輪



豚舎



作業祭。皆で豚汁会食。昭和40年代まで続きました。

昭和29年

# 精神疾患とは何か

解説者 平野 誠

回想：医師になって初めて担当したA君のこと

定年退職を数日後に控えて院長室を片付けていると、昔のケースレポートが出てきた。大学を卒業してすぐ、当時村田豊久先生が自閉症の子どもの対象に主宰してあった「土曜学級」に参加し、ボランティアとして関わった時の記録である。昭和45年9月から47年2月までのまとめである。小学5年のA君は今で言うアスペルガー症候群といえる。以下原稿のままの抜粋であるが、A君のことは「彼」、私のことは「セラピスト」という表現になっている。

(遊戯を中心にして～興味の対象の移り変わり)

昭和45年9月(5年生)当時、彼はそれより1年以上前から画用紙で飛行機を作ることに興味をもって、土曜学級のプレイの時間に2～3機作り上げることに決めていた。予め見取り図など一切描かずに、初めから画用紙に鉄を入れて器用に作り上げていた。プレイの初めに少なくとも1機作り上げるまでは、他のどんな誘いにも乗らず、もし強制的に止めさせようとするれば怒りと攻撃的な反応を来した。作った飛行機はそのあとプレイの間、特別のことがない限り片時も離さず手に携えていた。「サインはV」というテレビ番組が好きで、将来パイロットになると言ったり、自分のシャツにVマークを描くほどの傾倒ぶりであったが、実際はボールを使つてのプレイは、身体が不器用であるのと、少し真剣さが無いようで長く続かなかつた。集団の中に誘おうとするとセラピストに噛み付いたり、爪を立てたり、足で蹴ったりしてなかなか入らない。「ひも電車」に加わっても、すぐに「脱線だ」と言って掻き回し、また、決して先頭以外のポジションはとらなかつた。「箱電車」に他児を乗せて引っ張る際も、乗っている子どもに対する心遣いは全く無く、荷物を引っ張るようにしてわざとぶつけたりする有様だった。フォークダンスにも「こんな幼稚なことほしくない」と集団の輪から逃げ出し、セラピストが引き止めようとして身体同士が揉み合いになるが、その揉み合うこと自体を楽しんでいる風でもあった。偶々、皆と一緒に踊る事もあったが身のこなしが鈍くてリズム感も全くなかつた。11月頃から、発泡スチロールでこしらえた小さな汽車を持ってくるようになった。それも、毎週土曜日、学校から帰って九大に持って行くために大急ぎで作ったものでなくてはならず、あらかじめ作成したものでは気が済まないものであった。昭和46年1月になり、彼の希望で近くの消防署に行くようにした。幼少時からサイレンを特に怖がっており、手指で耳栓をしながらも、消防車に対する興味は異常なものがあり、自分で見えない部分は「メーターを見て何キロメーターと書いてあるか教えて」などと、止めどなく質問を発し、

かつ注意深く見学していた。3月からスケッチを始めた。いつもならプレイ時間の初めに、だらだらと飛行機作りをするのに、消防署にスケッチに行くようにしてからは、さっと飛行機を1機作り上げ、自分からセラピストを促し消防署に行こうと言うようになった。消防署では係員に対し、スケッチの許可を得るために躊躇することなく挨拶をして、コンクリートの地面に這いつくばって一心にスケッチしていた。しかし、スケッチといっても、余り対象を見る事はなく、既に頭の中にあるものを描いているようであった。4月になり、病院構内に駐車してある乗用車にスケッチの対象を変えた。はじめは、前もって自宅で図鑑から覚えてきたものを、スケッチの格好をとりながらも、そのまま正面像、側面像として描いていたが、次第に斜めから見た遠近感のある像も描くようになった。…(中略)…6月になると工作の材料が、紙からスチロール一点張りになり、ダンブカーなど家で作ってきた物を小箱に入れてきて、プレイの初めに、先ずその作品をセラピストに披露したあと、別に持ってきた未完成品および材料のままのスチロールを取り出して、安全剃刀と糊で製作にとりかかるといった。予め何の目印をすることもなく、また、指先を傷つける心配は全くなく、熟練工のように小さな作品を完成させて行く。それら作品群はきちんと実物の何分の1という縮尺が計算されていた。ソファ、机、エアコンの上などどこにでも寝そべて作る事が多い。一方、紙に描く絵は、背景入り乗用車から消防車にもどり、しかも火事の消火場面に凝るようになった。その後、12月にかけてスチロール製の自動車の種類はバス、消防車、クレーン車、ミキサー車、戦車などに広がり、昭和47年になると、「まだ作っていないのは霊柩車とテレビカーだけ」という程になり、「僕は大きくなったら自動車を作る人になりたい」と述べた。…中略…

(セラピストとの関係)

最初から会話は成立したが、セラピストの顔を初めて正視したのは約2ヶ月後であった。セラピストの方から話題を提供する間はいいが、問いかけをやめたり、興を引かないような話題をもちかけた時は、急に無関心になり相手にしてくれそうな他のセラピストのところに行く。しかし、他児におやつを取られたときや、棚にしまっていた彼の作品が元の場所に無かつた場合など直ぐ泣き顔になり、相手に当たるのではなくセラピストに抱きついてきて、セラピストを叩いたりするという形での関係はあるようだ。また、2人の間で会話が興に乗ってくると「あんた、あんた」を連発してセラピスト自身のことも尋ねるようになった。その際、過去2人で交わした特定の話の繰り返しが多く、答えの分かっている問いを何度もする傾向がみられた。約8ヶ月後になると、セラピストに悪戯をしたり、殴り掛かたり、唾をかけたりすることが多くなり、セラピストが彼の手を封じたりして揉み合いになると「こんなことが出来るから好きなんだ」と口走ったり、「あんたはねー、ボクの言う通りにすればいいの」と何かにつけて命令し、「勝手な事をいうな」と叫び、セラピストの誘いかけにはことごとく「厭」と反射的に答える時期があった。その頃は、プレイの初めにセラピストを見つけると、少し

# 精神疾患とは何か

## 精神疾患とは何か

精神疾患とは何か

意識したり、“来たか！”と言って逃げたりした。視線は数回合わせるようになり、時に“先生”と呼ぶこともあったが、「受け持ちのセラピスト」ということは理解しても2人の間に特定の感情的な関係が出来たとはいえない。…中略…。彼自身が予定していたことが急に出来なくなった場合にパニックに陥る。或る日、飛行機作りのために家から持ってきた安全剃刀を備え付けのエアコンのファンの中に落としてしまったとき、「仕方が無いので新しいのを買いに行こう」と言うと、“仕方がないじゃない！”と言って、涙を流して掴みかかり、噛み付いたりした。“ドライバーを持ってきなさい”と部下に命じる口調になり、備え付けの装置を分解しようと必死であった。彼自身の失策であるが、それによってステロールで自動車を作るという予定の計画が出来なくなったために、どうしようもない程の焦り、不安、悲しみと怒りをセラピストに向けたようだった。そのようなときは、平素は大人びた「台詞」を滔々と述べる姿は一変して、幼児の如くセラピストに纏わりついて泣くばかりであり、気持ちの表現を言葉で出すことが出来ない様子だった。…以下略…。

こうして消えかかった昔のコピーを書き写していると、当時のA君のノーブルな顔立ち、やや甲高い声、テレビアニメの台詞の口移しのようなトーンが甦る。A君は父親の転勤で関東へ転居、中学に進学し、その年の春に私は肥前に赴任した。上に抜粋した中だけでも、限局した興味、運動機能の不器用さ、感覚過敏性、予測外の事態で示すパニック、特異なコミュニケーション、独特の抑揚での話し方などが分かる。

今日、ローナ・ウイングにより自閉症スペクトラムとして社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害とそれに基づく行動の障害という3領域の基本障害が概念づけられ、アスペルガー症候群はその一つに位置する。ICD-10では広汎性発達障害の下位分類としてアスペルガー症候群があり、診断ガイドラインには、言語あるいは認知的発達において臨床的に明らかな全般的な遅延がみられないこと、自閉症の場合と同様に相互的な社会関係の質的障害と行動、関心、活動の、限局的で反復的常同的なパターンとの組合せに基づいて行われる。…と記載されている。

1970年代初頭の当時は自閉症と言えばカナー（Kanner,1944）タイプの研究が主流であり、アスペルガー（Asperger,1944）タイプは「自閉的精神病質」と呼ばれ、まだ報告は少なかった。村田先生から戴き、一緒に綴じ込んでいた論文別刷（石井高明、自閉的精神病質の症例研究、Jap.J.Child.Psychiat.8(3):187-195,1967）はすっかりセピア色になっていたが、それは異なる年令層3例の報告である。また、当時は土曜学級での集団遊戯療法的アプローチで何とか社会的相互交流性を深めようと、なごやかであるが喧嘩な雰囲気での試行錯誤の時代であった。今日では洗練され、障害特性に応じてより個別的な構造化されたアプローチがなされている。

後日談がある。A君と別れてから10数年後、思いがけなくA君が肥前に独りで訪ねてきた。成人し私より身長は高くなり、20代半ば、今日的表現では「草食系」のやや中性的な身のこなしだが立派な青年であった。観光バスのガイドをしているという。ルックスに恵まれ、好きな乗り物関係で、あこがれの制服姿、得意な事であれば相手が誰であろうと置かれた状況がどうであろうと物怖じせず言語表現でき、内容は比較的ワンパターンでいいという彼の特性と能力を活かした仕事を選択したことに感心したものである。既に10年以上経過しているにも拘らず、毎週2人で遊んだ内容、彼が何を聞いて私がどう答えたか具体的な言葉ひとつひとつを憶えていることに驚いた。小学校高学年の時と同じテンポで、「あの時、ボクがこう言ったらアンタはどう言った？」と質問攻めに会い、私が覚えていたエピソードの断片を語ると大仰に笑い、楽しいひとときであった。玄関車寄せで私の写真を撮り、記念にと自作のミニチュアの電車2両を置いて立ち去った。初めて会った時から40年、数えてみると現在では50歳に届いていることになる。彼のファーストネームは他に聞かない珍しい名前であり、ふと思いついてGoogleで検索してみた。すると3件ヒットし、何と彼が転居していった関東の同一県在住の人物ではないか。しかも乗り物（交通）関係の募金事業の募金者リストに掲げられており、そのページには小さな電車が7両連結されているイラストがあった。村田先生は土曜学級で診られた多くの自閉症児の予後について最近の御著書（村田豊久著、子ども臨床へのまなざし、日本評論社、2009）でも触れられている。A君、いやA氏は最も良い社会的適応性を発揮した一人であろうか。

佐賀県では、発達障害支援に関しては発達障害支援センター「結」やNPO それいゆのバックアップもあり、行政レベルの取り組みは全国的にも先行している。この数年で早期発見、早期対応の支援体制づくりは全県下へ面としての広がりを見せ、ゼロ歳児から就学前、学齢期、思春期、大学生、そして成人の就労問題まであらゆるライフステージでの切れ目のない支援体制が構築されつつある。肥前は医療面での専門的なサポートをしてきたが、平成21年度から「こどもの心の診療拠点病院」として県のモデル事業を委託されている。引き続き保健・福祉・教育行政、当事者福祉団体などとの連携が深化していくことを祈りたい。



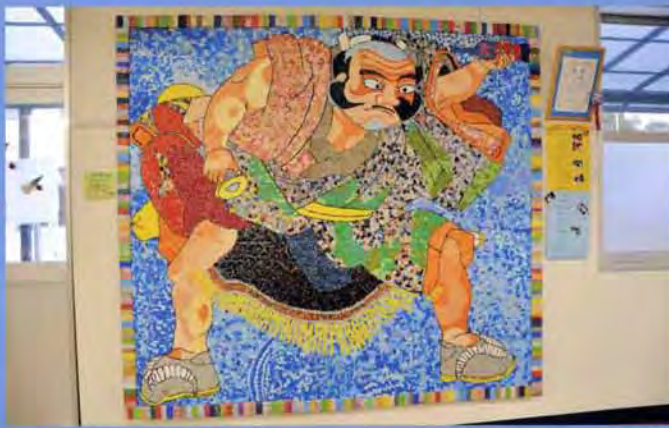
平野 誠

九州大学医学部卒。昭和47年当院就職。

平成14年より当院院長。今年3月定年退

職をむかえます。

# 肥前文化祭



平成 21 年 12 月 10 日毎年恒例の肥前文化祭が開催されました。今年は新型コロナウイルスの影響で、病棟ごとの文化祭となりましたが、とても多くの作品が集まり盛り上がりしました。その中でも、院長賞をとった東 1 病棟の巨大なやっこさんは、とても大きな作品で迫力があって魅了されました。(OTR 平位)



# アルコール研修会



平成 21 年 11 月 25 日～ 27 日の 3 日間、平成 21 年度アルコール・薬物関連問題研修会を開催しました。アルコール・薬物関連問題の予防、教育、医療、司法、行政、矯正に関わる様々な職種を対象に毎年開催しており、今年も北は北海道から南は沖縄まで、計 62 名の方にご参加いただきました。(アルコール・グループ長 武藤)



# 認知症研修会



平成 21 年 10 月 26 日 (月)～ 29 日 (木) まで、当院教育研修センターにおいて認知症高齢者対策研修が行われました。近県はもとより北は京都から南は沖縄まで 39 名の熱心な研修生が集まり、院内外の認知症に関するエキスパートの先生方から興味深い講義を受け、「認知症の人と家族の会」の森久美子先生からは家族の立場から貴重な講義を聴くことが出来ました。研修中に意見交換をした相互の研修生の意見から視野が広がり、研修生皆が今後のケアに活かそうと明るい笑顔でそれぞれの施設に戻られたのが印象的でした。(東 4-1 病棟看護師長 森)



# 東 3 の 1

東 3-1 病棟は、慢性閉鎖の女性病棟で、統合失調症が全体の 8 割以上、その他知的障がい・うつ病などの患者様が入院されています。患者様によっては、合併症もあり変化への細やかな気づきが重要になります。橋本病棟医長、岩永病棟副医長、病棟看護職員スタッフは、ベテランから新人まで物静かな 23 名の看護職員です。患者様は化粧やマニキュアなどおしゃれをして、華やかな雰囲気が漂っているかなと思います。生活技能訓練（SST）も取り入れて日常生活が自立できるよう、援助・指導に頑張っています。（病棟師長 伊坂）



# 作業 療法 室

作業療法室には 17 名（作業療法士 14 名、助手 3 名）が在籍しており、主に各病棟やデイケアなどで活動を行っております。作業療法士は他の多くの職種の方々と協力しながら、対象者の方が退院に向けて動き出す際の援助や地域生活を行う手助け、その人にとって意味のある生活を共に見つけていこうとしています。当院の作業療法の歴史は古く、周辺病院よりいち早く作業療法士が配置されました。これからは地域の方々と連携も深め、地域に根ざした医療を目指したいと思います。（OTR 平位）



# 薬剤 科

薬剤科は現在 6 名の薬剤師が、『私たち薬剤師は、医療チームの一員として専門的知識に基づいた安全で適切な薬物療法の提供に貢献します。さらに「この病院で最も大切な人は患者さんである」という理念を基本とし、思いやりの心を持ち、患者様の QOL を高めることに寄与いたします』をモットーに、患者様の薬物療法に寄与しています。特に薬剤管理指導業務（服薬指導）によって患者様が安心を得ていただくこと、医薬品情報管理業務（DI 業務）によって膨大な医薬品に関する情報を、正確かつ迅速にお届けすることに力を入れています。（薬剤師 藤田）



# 百年庵

神崎町の「百年庵」では、お隣の井上製麺工場で作られたこだわりの麺を使った、そうめん、うどん、そばを食べることができます。

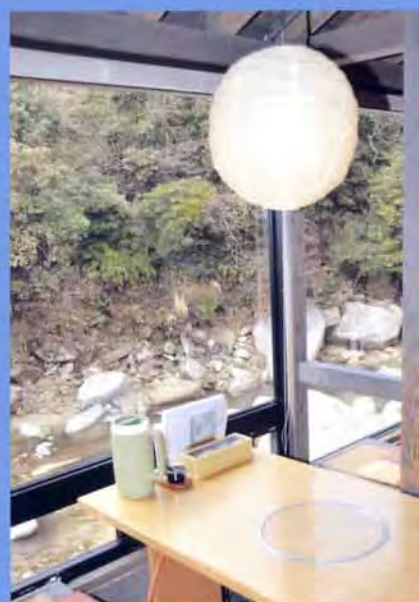
(取材班)；窓から見える春振山麓の眺めが素晴らしいですね。

(店長さん)；秋には九年庵の紅葉を見にたくさんの方が来られます。冬になると、あたり一面雪景色となります。もちろん春や夏もいいですね。

(取材班)；季節によって人気メニューはやっぱり違いますよね。

(店長さん)；夏は、おそうめんが人気です。梅や卵、お茶をそれぞれ使った三色そうめんもありますし、隣のそうめん工場の敷地でそうめん流しもしますよ。

冬場は掘りごたつの下にホットカーペットを敷かれていたり、高齢の方へは足元を気遣って声かけをされていたりと、こまやかであたたかい気配りが感じられるお店でした。      では、また次回！！(OTR 平位、PSW 鶴丸)



肥前写真同好会

## 「有明海」

早朝の有明海は、とても静かでした。  
むつごろうたちも、まだ眠っていました。

小川やましろう





## 目次

- pp 2-3 吉野ヶ里対談 第6回  
「肥前今昔物語」
- pp 4-5 特集 「肥前アーカイブズ」
- pp 6-7 精神疾患がよくわかるシリーズ 第6回  
「精神疾患とは何か」
- pp 8 活動・イベント報告  
「肥前文化祭」「アルコール研修会」  
「認知症研修会」
- pp 9 各部署をご紹介します。  
「東3の1病棟」「作業療法室」「薬剤科」
- pp 10 近くの名店 「百年庵」
- pp 10 肥前写真同好会 「有明海」
- pp 11 クラブ活動報告 「ゴルフ愛好会」
- pp 11 お知らせ  
「新グラウンド完成。」「鶴丸です。」
- pp 11 編集後記

平成22年3月25日発行

編集・発行：肥前広報誌作成委員会（佐伯、川原、鶴丸、江頭、  
藤瀬、天野、平位、安永、武田、佐藤、行時）

発行所：独立行政法人国立病院機構

肥前精神医療センター

〒842-0192 佐賀県神埼郡吉野ヶ里町三津160

Tel 0952-52-3231 Fax 0952-53-2864

WEB <http://www.hosp.go.jp/~hizen/>